

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第40号

平成29年1月10日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

笠置山行宮の急に駆けつけた正成が引き返したとされる地

国道163号沿い、和東町木屋(こや)に残る駒返岩

巨岩も、台風・土砂崩れ等で原形をとどめず

「駒返し岩、ご存知ですか」

12月、思わぬ出来事から楠公事績を知ることとなった。隣組の忘年会があり、奈良からの帰途、タクシーの中で、正行談義に花が咲き、20分ほど走っている間、田原の里の歴史や楠正行の人物像等について、話題が途切れることなく話し続けていると、自宅付近に到着した。

すると、タクシーの運転手さんが、次のように話しかけられたのである。

「お客さん。今日は、大変貴重な話を聞かせていただきました。ありがとうございました。実は、私は笠置町の出身なのです。大楠公ゆかりの町です。ところで、加茂町に”駒返しの岩”があることはご存知ですか？」(写真：国道163真下に見える駒返岩)

私は、駒返しの岩の事は知らなかったもので、「知りません。どのようないわれの岩ですか？」と尋ねると、「元弘の戦いで、後醍醐天皇の軍が危うしと聞きつけた正成公が加茂付近まで駆けつけたところ、既に、笠置山が炎上していたので、この地から千早に取って返したと伝わる岩が残っています。」とのこと。

タクシーの運転手さんに、教えていただいたお礼を言い、「一度、行ってみます。」と伝え、別れた。

和東町略史に載る駒返岩

数日後、相楽東部広域連合教育委員会を訪ね、この岩の事を詳しく教えていただいた。

頂いた和東町略史によると、以下の記述がある。

<駒返岩>

和東町の木津川河港木屋浜に“駒返岩”と呼ばれている大きな岩が、川中に突き出ている。

『相楽郡誌』(390頁)には、「駒返岩 中和東村大字木屋 木津川北岸川中に突出す。高さ12丈7尺、周囲



10丈許の巨岩なり。傳え云ふ元弘3年(1333)楠木正成笠置山行宮の急を救わんと欲し、軍を率いて此の所に至りしが笠置山既に陥るを見て空しく師を返せしを以て駒返しと云う」と記されている。

また、『京都府地誌』(相楽郡村誌)の和東郷木屋村の古跡の項にも「駒返岩 村の南方木津川中に突出す 高12丈7尺周囲10丈2尺 旧と兜

石と云う 俚俗云元弘3年楠木元成笠置山行宮応援の爲め軍を率いて此所に至る然るに笠置山既に陥るを以て空しく師を班す 因て此石を駒返と云う」と記されている。

ところで、駒返岩は、昭和28年の南山城水害で流出し、駒返岩付近は昭和61年の大雨のかけ崩れで原地形をとどめていない。

古老のご案内で駒返岩に降り立つ

12月25日、私は、現地に向かった。

国道163号線沿いにこの岩があるらしいということは分かっているが、相楽東部広域連合教育委員会の方々も、最近ほとんど誰も近寄っていない場所で、国道163号沿い、木津川の河原で雑草が生い茂っており、道路から



降りるのも困難ではないでしょうか、とのことであった。

和東町木屋の道路標識が立つ集落に入ったところで、丁度、在所の古老を見つけて、岩の所在をお訪ねすると、「案内してあげましょう。」と、お連れ頂いた。

「駒返岩は、この道路下です。」

大楠公は、和東から木屋峠を通過して、木津川に下りてきたとされています。木屋峠からこの地に下りてくる谷沿いからは、正面に笠置山が見通せます。大楠公は、この岩の上から笠置山を遠望しながら、『時遅し』と引き返されたのでしょうか。

私たち、子どもの頃は、この岩近辺で川遊びをしたものです。私らは、エンロ岩で遊ぼう、とここにやってきたものです。

しかし、今はほとんど誰も近づかないので、このような状態ですから、気を付けて降りてください。」

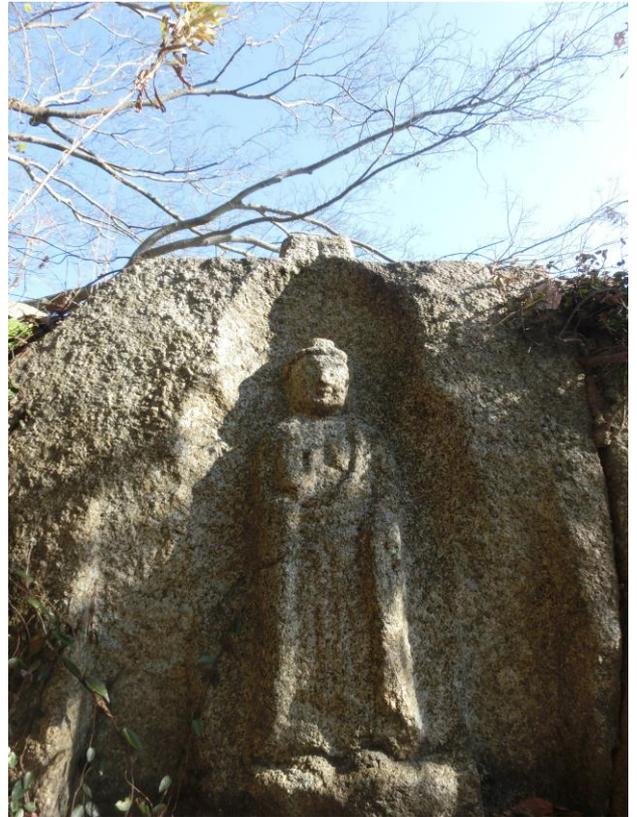
岩の西面に刻まれる石仏

私は、国道163号の少し道路幅のあるところに車を止め、河川敷に降りようとするが、どこにも道らしきものはない。(写真上：東に向かって撮影 背後に木津川)

かなり悩んだが、道路から河川敷に繋がる間に生えている樹木頼りに、やっとの思いで、河川敷に下りた。

私の降り立った岩は、高さが数メートル、周囲は十数メートルほどであった。先ほどの和東町略史によると、高さ約38メートル、周囲約30メートルの大岩ということになるが、台風と土砂崩れによる流失で、今の形になったのであろう。

この岩に降り立ってみると、西向きに小さな石仏が刻まれていた。(写真下：石仏の下から北に向かって 背後に国道)



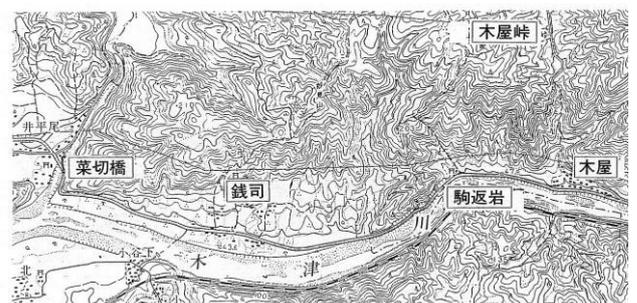
岩の壁面に、高さ1メートルほどの石仏が彫られており、石仏の下部には蓮弁もくっきりと刻まれている。

誰が彫った石仏なのか、和東町略史は全く触れていないが、駆けつけた正成の落胆・悲哀を感じさせるとともに、後醍醐帝が逃げおおせるようにと祈っているようにも見えた。(写真上：駒返岩に彫られた石仏)

しかし、元弘の戦いから約680年、現在の交通至便な生活をする私たちからすると、木津から笠置に向かっていたとしたら、とても笠置の炎上は見えないのではないかと、思っていたが、楠木正成が和東村から木屋峠を通過してこの地に入ったと知らされ、それなら笠置炎上は見ることができたのだと納得した。

現況から申し上げて、とても、行ってくださいとはお勧めできない。しかし、国道163号を通る機会があれば、木津と笠置の間、木屋の地に、正成駒返し岩が残っていることを思い出し、木津川との河原辺りに視線を向けていただきたい。

ご参考まで、和東町略史に載る、駒返岩付近図を転載しておく。(下：和東町略史に載る駒返岩付近図)



(文責「四條畷楠正行の会」代表 扇谷昭)